

スキリア、カレリヤ、ブリアチア等の共和國は何れもその國土の調査を自發的に希望し、レニングラードの大學へむけて調査方を依頼した。レニングラードの地質調査所(The Federal Geological Committee in Leningrad)は國內の鑛産資源の調査に従事し、モスコウの中央統計局は地方及各共和國の統計局と協力調査に任じ、

獨逸の地理學界

(二)

寺田貞次

しかもそれは地方へは地方語で報告されるのである。聯邦の計劃局ではすべての共和國の經濟關係を考慮して、その電化と交通の發達をはかり、各聯邦は孜孜として、各自の經濟生活の互助増進をモットウにして努力してゐるの現状である。以下略。(F)

三、ミュンヘン大學

ペンク教授指導のアルペンエクスカーション參加の爲め、ミッテンワールトに向ふ途ミュンヘン大學を訪ねる。新しい大理石造の堂々たる建物、大廣間も無遠慮に通ると、左側に地理インスチテュートを發見した、百〇二號から百〇三號に至る四室が之に充てられて居る。當教室の主任は南極探險を以て知られてゐるヅライガル

スキー教授 Erich von Drygalski である、教授は一八六五年の生れ、ボーン・伯林並にライプツヒに學び、極地方の探險に従事し、一八九一年頃にはグリーンランドの西岸を探險し、一九〇一年より三年迄南極探險を企て、Kaiser-Wilhelm II Land を發見した、一九〇六年以來當大學の教授となり今に至つたもので、其著には Die Grönland-Expedition d. Gesellschaft für Erdkunde (19

第五圖



02-3), Die Deutsche S.-Polarexpedition (1915), Einführung d. Landesnatur- und d. Entwicklung. Völkler (1922) 等がある。又日本の研究で知られて居る

Kare Haush-

ofer 教授も居る。氏はミュンヘンの人、一八六九年生、陸軍に屬し印度・東亞・西比利亞に旅行し。殊に一九〇八年より十年迄日本に滞留。一九一九年以來當大學教授として地理を講じて居る方で、日本に關する著者が多い、例へば Geogr.

Grundlage der Japan(1911), Dai Nihon(1913), Deutscher Anteil an der geog.Erschliessung Japans (1914); Die polit. Parteien in Japan (1914), Die geog.Grundrichtungen d.Jap. Reichsentwicklung (1920); Das Japanische Reich 等は是である。

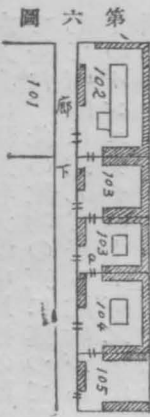
何れも休暇中で、御面會申す機がなかつたのは遺憾であつた。居合はせた Dr. Dister 氏が懇切に案内され、各室を縦覧することが出来た。最初に觀たのが、百〇二號室、之は圖書室で、室の中央に長卓子を置き、周壁は一面の書棚をなして居る。學生三名研究に従事して居た。次の室百〇三號は、小さい室で、地圖室である。周壁に抽出付の地圖箱を並べ、北極グリーンランドの浮彫圖や、アルプスの氷河の寫真など陳列されて居る。標本の性質から觀ても流石は探險家の研究室と思つた。地球儀や製圖板なども見受られた。

次(百〇三號)同様な室で、ハウスホーファー博士並にツロール(Dr. Karl Troll)博士の室である。中央に机を周壁には掛圖や海圖など保存

用の丈の高い地圖箱を置き、小印刷物類をも蒐集して居る。次の百〇四號室も小さい室で、幻燈用フィルム保存室、左右兩壁に硝子箱を備え多數のフィルムを蒐集して居り、北獨の地圖をかけ、リヒトホルヘンの寫眞が一枚かけられて居り、地形標本も集められて居る。次百〇五號室ドクター・デイステル氏の室(Dr. Diszel)窓側に机を置き、書棚や地學用器械類を保存して居る、裝飾としてアルプスのパノラマ寫眞がかゝげられて居た。

當大學は、有名なオスカー・ベツシエル教授の居た處であるから、何か遺物でも觀る事が出来るかと尋ねて見たが、何等發見する事も出來ず遺憾であつた。

地學インスチテュート

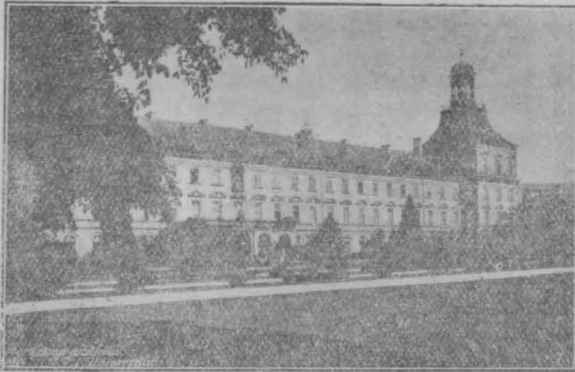


四、ボーン大學

獨逸の地理學界

巴里行の途ケルンで一泊、翌朝早々ライン沿岸を鐵道でボーン市に行く。停車場のすぐ前はアルトシュタット(舊市街)で、ミュンスタープラツツと稱

第七圖



ボーン大學

し、十二三世紀の古い御寺や建物が並んで居り、ブラツツには Ludwig van Beethoven の銅像などが立つて居るベトトーフエンの家と申すのも此の近くに在る。舊市街の南側はすぐ大學で、二三の高塔を備ふる黄色い大きな建物が廣漠たる Hof-Garten を稱する廣庭を控えて建てられて居

る、昔のシュロツス(御城)を利用したもので、友人共は獨逸各大學中屈指の建物であると評して居た、此の建物の東に連つて長く廊下風をなして河畔に達して居る建物がある。圖書館や多くのインスチテュートが之を利用して居る、地理のインスチテュートは、此の建物の東端で、圖書館と隣り合つて居る、極く汚ない建物で、小さい入口を入ると、がらんとした玄關がさみ

Dr. Alfred Philippson,
ord. Professor der Geographie,
Universität Bonn.

跡筆ソソビツリヒ

しげに暗黒な廊下に連つて居る。階上は地質か何かの研究室、此の眞暗な廊下こそ地理のインスチテュートである。暫く揭示場に講義の様子をうかがつて、主任教授の御室を訪ねる。

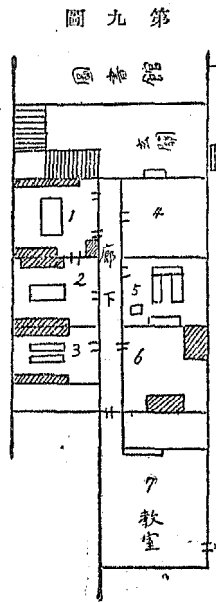
主任 Alfred Phil-

ippson 教授は、ボン及ライプツヒ大學に學び、ベルン及ハルレ大學教授を経て、一九一一年以來當教室に居られるので、希臘小亞細亞方面に旅行し、此方面の研究は多く發表されて居る、殊に Siever の Länderkunde の一部として書いた Europa 並に一九二一年に出た Grundzüge der allgemeine Geographie などはよく人の知る處である。折悪しく御不在であつたから助手の厚意で御宅を教へてもらい、訪問する。御宅は教室の西南數町 Königstr. I 鐵道線に沿へる處に在る、北向に建てる小ぢんまりした三階建が教授の御宅である。刺を通すると、直ぐ三階の教授の書齋に案内された、三間に四間位の室、一方庭に面し閑靜である、周壁には書棚を備え、室の左側に机を、其前に圓形の卓子を置き應接に供してある、書棚には地理書その他、多數の紙製函を準備し、小印刷物を分類蒐集されて居る、卓子上の菊一輪美しく客待顔に名刺受の御盆には、山なす名刺來客の繁きを物語る様であつた。教授は、丈のすらりとした高き、半白髪の貴公子的の方で齡既に

六十を越えて居らるゝであらう、(一八六四年生)至極温厚に談話され、自分を見るや、直に山崎直方先生を思い出され、安否を尋ねられた、先年の大震の際には御見舞を差出して置たが、或はアドレスが間違て居たものか返事がなかつたので、御心配申して居た、御健康かと御尋ね下して居た、暫く御話を承り教授も午後は登校するからと云はれるので、再研究室に歸り、教室内を縦覽する。

薄暗い玄關は薄暗い廊下につゞいて居る、右側には圖書室・助手室・主任教授室・左側にはゼ

地理インスチテュート



獨逸の地理學界

ミナール室、標本室、廊下の突き當りは、廣大な講義室になつて居る。

(1)は圖書室で、中央に卓子を周壁に書棚を藏すること他と異らない。(2)は、助手室、机の他、雜誌並に地圖類保藏用箱を備ふ。(3)は主任教授室、ヒリプソン教授の御机の他、掛圖並に各國地圖・演習用地質標本等を集む。(5)は、ゼミナール室、稍廣き室にて、中央に卓子數脚を並べ、周壁にはリヒトホーヘン並にライン教授の寫眞像をかゝげ、其他もと當教室の助手にて世界大戰に陣歿せし Hans Gehne 博士の寫眞より Athen, Riesengebirge, Nürnberg Donauthal bei Regensburg 等の風景寫眞をかゝげて居る、殊にライン Johann Justus Reim は一八七三年から七五年迄(明治六年より八年迄)日本に來り、其結果は Die Nakasendo in Japan (Gotha 1880), Japan (二冊)(Berlin, 1881-86) として發表され、ラインの Japan と稱して有名になつた人であるので注意を引いた。一八七六年にはマールブルグより一八八三年にはボン大學の地理教授となり、一

九一〇年迄當教室に居られ、一九一八年一月廿三日を以て當地に歿したのである。

(6)標本室で、幻燈機を初め、地學用機械其他を保存し、(7)は大講堂で、優に數百人を收容し得ると考へられ、黑板、地圖掛の設備等よく整て居りフイリブソン教授の御講義が此處で初つて居た。講義の終つた後、フイリブソン教授には懇切

にも再教授内を御案内下され、圖書室にてはカタログに付て説明を加へられ、幻燈映畫の部では、日本の部を特に注意し未だ悉無であると云はれて居た。ラインの様な日本通の教授が居た處にも似合はぬと不審の感がした、J. H. O'Neill教授も丁度來合はせ面會することが出來た。(氏は一八七九年生)ゲッチンゲン並に伯林に學び、一九一二年來當大學に職を俸じ、一九一八年教授として、經濟地理を担当して居る。西班牙北米に旅行し、其著も少くない、自分の訪問した時は、濠洲及南洋の經濟地理を講じて居た。

要するに、當研究室は其設備の點に於て決して完全な研究室とは考へられなかつたけれども

日本に關係あるライン教授の遺跡であると云ふことゝ、現今獨乙の地學者中屈指の老大家フイリブソンの居らるゝと云ふ點は、余の興味を引いた點であつた。ライン教授の巡跡をも訪ひ度い考であつたが、寸暇なく、歐米巡禮者の訪問する處々をのぞきケルンの宿に歸つた。

五、ケルン大學

ケルン市の南郊に在る、ケルンからボーンに至る鐵道の沿線ラインの河畔に濱して居る、新しい建築だけに堂々たる建物である、もと高等商業學校であつたのが昇格したもので、商品陳列館は本館とつゞいて別に設置され、重に鑛産工業品を蒐集、地層の模型より、石油工業模型、鐵・銅・錫・石炭等各工業品、時計工業、陶磁器製造、石板石、屋根板、セメント等の標本を蒐集し、寫眞統計圖表等丁寧懇切、規模の大ならざるに比し、有益なる陳列室、精細縦覽の暇のないのを遺憾に思つた。尙經濟地理用の世界重要產物の標本も本館正面玄關の樓上廊下に陳列され、各大學に見ない整頓したものであつたが、是も充

分に縦覧するの機を得なかつた。

地理インスチテュートは、本館の樓上の一部を以て之に充て、四室を備えて居る。助手室を

地理インスチテュート(ケルン大學)

初め、地圖

室、主任教

授室並に圖

書室が是で

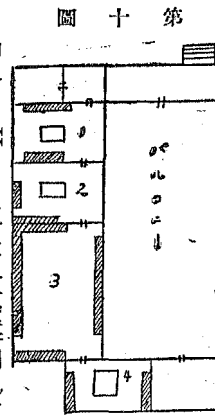
ある、助手

室を訪ねる

と助手の Kraus 博士早速案内してくれた、先づ

(1)室より縦覧する。

(1)は地圖室で、掛圖ども草々集められ、(2)は主任教授室、中央に机を地圖箱、幻燈用フィルム函等を備へ、阿弗利加の風景寫真が室を飾つて居る。次の(3)室は稍廣い室で、圖書兼研究室をなし、周壁は書棚を以て充たされ、演習用の机も準備されて居る。主任教授トルベッケ Franz Thorbecke 博士も御來室幸拜眉の榮を得た。教授は、ハイデルベルヒの産(一八七五年生)ケルン及ゲッティングに學び、當大學の前身ケルン高

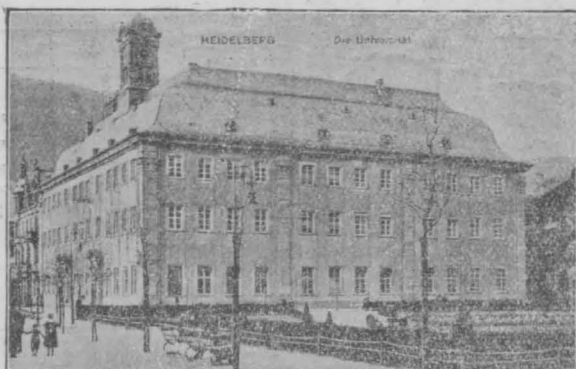


等商業教授より、一九一九年當大學教授となつたのである、阿弗利加の研究家で、先年カメルン地方を旅行し、Das Hoch land von Mittel Kamerun 三冊を公にした。氏の室を飾つて居る阿弗利加風景の水彩畫は、教授夫人のものせし處であるとき、再熟覽する。御講義の時刻になつたから欠禮する。此の研究室は他の大學に比すると、規模に於ては勿論大きいとは申されないけれども、圖書と云ひ標本と云ひ、よく整つて居り、良研究室たるを失はない。もと商業學校であつたのと、土地柄が商工業地である爲めに經濟地理の研究が盛で、トルベック教授は熱帶地方の經濟地理を、ゼミナールにても經濟地理關係のものが多く撰ばれて居た。

六、ハイデルベルヒ大學

伊太利旅行の歸途、ハイデルベルヒに立寄る、古い町ながら河畔の景色綺麗である。大學は古い大學だけあつて建物はきたない、恰もエデンバラ市の舊市街かブラーグ大學の舊館を見た様な氣がする。本館の左側に並んで居る教室の二

第十圖

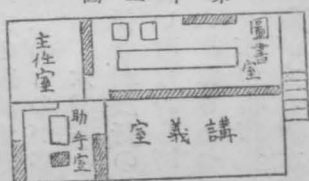


ハイドルベルグ大學

階が地理の Seminar である、室は僅か四つしかない、助手室、主任教授室、圖書室並に講義室である
助手 Paul Gauss 博士の厚意に依り縦覽する。

助手室は、室の中央に机一脚並に二三の卓子を置き、新着の圖書の整理に従事し、一隅には抽出を備ふる標本箱を置き、地質並に産物標本を蒐集し、一壁には掛圖置を備へ、又書棚をも準備し、雜誌類、地理用機械をも保存し、バラウ島土人製の竹製の地圖は獨逸の該島占領當時

第二十圖



地理セミナール

の思出として感慨深からしめた。

圖書室は、廣大なる室を利用し、室の中央に長形の卓子を置き、周壁に書棚を又地形を示す浮彫圖類をも準備せり、圖書の分類・小出版物の蒐集等別に注意すべ

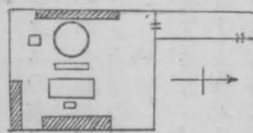
き點もない。
要するに、研究室としては餘り感服する様な設備もないけれども、主任教授は Alfred Hettner 教授で獨國ではベンク教授等と並んで有名な地學者である爲めか、此研究室も光つて見えた、折惡しく、教授は御不在であつたから、助手の紹介を得て御宅を訪問する。

大學から東南數町、河をへだて、其對岸に在る、有名なハイドルベルグのシュロスを眺める、河畔の風景頗よい處、ヘットナー教授の御宅である。幸御在宅心よく面會して下した、二階の明るい河に面せる室が教授の書齋である。周壁

圖 三 十 第

Dr. Alfred Hettner
Prof. d. Geographie an der Universität
Heidelberg

跡筆の授教一ナトツヘ



室書授教一ナトツヘ

には書棚を繞らし、机の他圓形の卓子を置き、ソファ・安樂椅子等氣持よく飾

られて居り、極く落付のあ
る室である。教授は申す迄
もなく一八五九年八月六日
ドレスデンに生れ、ハレー・
ポーン並にストラスブルヒ
に學び、キルヒホーフの影
響を受くること多く、南米
殊にペルー・ボリビア・ブラ
ジルを旅行し、一八九五年
には地學に關する雜誌を發
行した。Geogr. Zeitschrift

是である。一八九八年にはハイデルベルヒ大學
教授となり、埃及、アルゼリア、チュニスを究め、
一九一三年には東亞及南亞を視察して、日本に

獨逸の地理學界

來られたのは此時のことである。

圖 四 十 第



置位の宅授教一ナトツヘ

Schweiz(1887), Reisen in den Kolumb. Anden
(1888), Russland(1905), Grundzüge der Länder-
kunde I, Europa(1907), Englands Weitherrschaft
und der Krieg(1915), Die Überflächenformen d

五

五

Festandes(1921), Die Geographie ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden(1927) 等其著書甚だ多い殊に地理方法論に於ては頭角をあらはして居る。將に七十に垂んとして居るが頗る健全に見受けられ、一九一三年、當大學の Smithemiet 氏と共に本邦に來らた當時を追懷せられ、京都大學の丑田氏(當時京大地理教室の助手た

りき)の案内で日本アルプスを踏査、東京で山崎博士に會し、日光横濱・箱根等を視察し、再京都・奈良を經神戸から乗船支那に渡つた云々と話して居られた。最後に山崎、小川諸氏に宜しく傳へてくれとの御傳言でありました。日本アルプスの一名勝ヘットナー石のことども思ひ浮べて愉快であつた。

西遊夢錄

(十五)

瀧川規一

蘇國の部

(XVI) ジョン・ノックスの家と彼の生涯 (一)

ホルード宮とメリ女皇との連想を辿りつゝ旅足は間近にあるジョン・ノックス(John Knox)の家に向ふ。宮殿正門から次第上りに傾斜せるハイ・ストリート(High Street)を行くと左側に出張つた古風な家がある、道路から直接に幅廣からぬ階段を登つて戸を叩けば所謂ノックスの家なるものに請じ入れらる。斯うした處には何處にもあるが如く往訪簿に署

名をさされる。やがて狭い薄暗い部屋に案内され或はノックスの書齋或は會合室なるもの或は寢室などと順次に説明よろしくあつて遂に階下にある諸種の土産物や記念品の賣店に入る。宗教的運動の主唱者たるノックスを象徴する家としては誠に相應はしい陰鬱な家である。

一九〇五年にはノックスの誕生四百年祭が盛に行はれた。

獨乙にはマルチン・ルーテル(Martin Luther)が居り、瑞西にはジョン・カルヴィン(John Calvin)が居り夫々宗教改革の運動を起した。獨乙國民の大半が新教徒(Protestant)となつた